

新1万円札の肖像「渋沢栄一」について考える



上田技術士事務所

上田 和男 UETA kazuo

(金属部門)

1. はじめに

新1万円札の肖像画に渋沢栄一の顔写真が使用されることとなった。今まで渋沢栄一について、殆ど興味を持っていなかったが、一応、調べることにした。「論語と算盤」と「雨夜譚（あまよがたり）」について考えることにした。現代語訳「論語と算盤」の記者守屋淳氏（ちくま新書）によれば、彼が設立にかかわった会社は約470社、それ以外に500社以上の慈善事業にも関わり、後世、「日本資本主義の父」「実業界の父」と呼ばれてノーベル平和賞の候補にもなっている。

渋沢栄一の言葉を編んだ本はこれまでも何種類も出されているが、この「論語と算盤」は、彼の自叙伝である「雨夜譚」（岩波文庫）と並んで、もっとも読みごたえのある入門書といってよいだろう。

2. お札の肖像画等について

財務省 (<https://www.nph.go.jp>) によると、最も多くお札の肖像に登場した人物は、聖徳太子である（乙百円券（昭和5（1930）年発行、い百円券（昭和19（1944）年発行、ろ百円券（昭和20（1945）年発行、A百円券（昭和21（1946）年発行、B千円券（昭和25（1950）年発行、C五千円券（昭和32（1957）年発行、C一万円券（昭和33（1958）年発行である。財務省のカッコ内は筆者。

お札の偽造防止技術～現在発行されているお札～

「さわって」わかる 深凹版印刷、識別マーク

「すかして」わかる すき入れ、すき入れバーパターン

「傾けて」わかる ホログラム、潜像模様、パールインキ

「道具で」わかる マイクロ文字、特殊発光インキ

現在発行されているお札

壱万円（福沢諭吉） 平成16年（2004）11月1日

五千円（樋口一葉） 平成16年（2004）11月1日

千円（野口英世） 平成16年（2004）11月1日

二千円（世界遺産に発表された沖縄の首里城にある守礼門を主模様として描かれている。）

平成 16 年 (2004) 11 月 1 日

日本のお札に初めて肖像が登場したのは、明治 14 (1881) 年に発行された「改造貨幣壹円券」で、これ以降、平成 16 年 11 月に発行された現在のお札を含めて、17 人の人物が登場している。神功皇后 (しんぐうこうごう)、板垣退助 (いたがきたいすけ)、菅原道真 (すがわらのみちざね)、和氣清麻呂 (わけのきよまろ)、武内宿禰 (たけのうちのすくね)、藤原鎌足 (ふじわらのかまたり)、聖徳太子 (しょうとくたいし)、日本武尊 (やまとたけるのみこと)、岩倉具視 (いわくらともみ)、高橋是清 (たかはしこれきよ)、伊藤博文 (いとうひろぶみ)、福澤諭吉 (ふくざわゆきち)、新渡戸稲造 (にとべいなぞう)、夏目漱石 (なつめそうせき)、野口英世 (のぐちひでよ)、樋口一葉 (ひぐちいちよう)。

明治 24 年 (1891) に日本で一番大きなサイズのお札が発行された (改造百円券: サイズ 130×210mm)。明治 32 年 (1899) に金本位経済制度導入に伴い、「日本改訂兌換券」が発行開始され、昭和 21 年 (1946) から 23 年にかけて A 券 6 券種を順次発行した。昭和 23 年 (1948) に日本で一番小さなサイズのお札が発行された (A 五銭券: サイズ 48×94mm)。昭和 25 年 (1950) から 28 年にかけて B 券 4 券種を順次発行した。現在発行されている 1 万円券の肖像は福澤諭吉ですが、彼は明治の思想家で慶應義塾を設立されている。1 万円券の表面は、凹版 2 色・地模様など 12 色、裏面は 1 色・地模様など 6 色である。五千円券は、明治時代の小説家・歌人の樋口一葉の肖像である。二千円券は、細菌学者の黄熱研究に尽力した野口英世の肖像画である。二千円券は、首里城の守礼門である。

お札の肖像はだれが決めるのか？

通貨行政を担当している財務省、発行元の日本銀行、製造元の国立印刷局の三者で協議し、最終的には日本銀行法によって財務大臣が決める。お札の肖像の選び方は、特別な制度はないが、おおよそ次のような理由で選定されている。

- ・日本国民が世界に誇れる人物で、教科書に載っているなど、一般によく知られていること。
- ・偽造防止の目的から、なるべく精密な人物像や絵画を入手できる人物であること。現在のお札の肖像は、明治以降に活躍した文化人の中から選ばれている。お札のデザインは肖像が描かれているのは、人の顔や表情のわずかな違いにも気が付くという人間の目の特性を利用している。

3. 渋沢栄一について

はじめにで触れた渋沢栄一について、「論語と算盤」「雨夜譚」の 2 冊から、筆者が感じたことを記す。

現代語訳「論語と算盤」の訳者守屋淳氏 (ちくま新書) によれば、『論語』は、中国の春秋時代末期に活躍した孔子 (BC552~BC479) と、その弟子たちの言行録であり、その卓越した内容から、後世、中国や日本、韓国やベトナムなどの各国に大きな影響を及ぼしていた。

本書は渋沢栄一が書いたわけではなく、その講演の口述をまとめたものである。1886 年、

渋沢栄一を慕う人々が竜門社という組織を作った。これが現在の渋沢栄一記念財団の前身となったのだが、この竜門社が『竜門雑誌』という機関誌を発行、栄一の講演の口述筆記を次々と掲載していった。その中から、編集者であり実用書の著者でもあった梶山彬氏が、90項目を選んでテーマ別に編集したのが本書になる。大正5（1916）年に東亜堂書房から発行され、以後、国書刊行会や角川学芸出版から再刊されてもいる。はじめにでは、「近代日本の設計者の一人」に数えられる偉人に他ならない。

筆者は、現代語訳「論語と算盤」の2018年12月10日、第33刷発行を視ている。第1刷発行は、2010年2月10日である。

「論語と算盤」の目次は、はじめに、第1章 処世と信条、第2章 立志と学問、第3章 常識と習慣、第4章 仁義と富貴、第5章 理想と迷信、第6章 人格と修養、第7章 算盤と権利、第8章 実業と士道、第9章 教育と情誼、第10章 成敗と運命で構成されている。

各章の項目を見ると、第1章では、『論語』とソロバンは、はなはだ遠くて近いもの、士魂商才、『論語』はすべての人に共通する実用的な教訓、時期を待つ必要がある、人は平等であるべきだ、争いはよいのか、悪いのか、立派な人間が、真価を試される機会、蟹穴主義が肝要、得意なときと、失意なときである。第2章では、現在に働け、自ら箸をとれ、大きな志と、小さな志の調和、立派な人間の争いであれ、社会と学問の関係、一生涯に歩むべき道である。第3章では、常識とはどのようなものなのか、憎みながらも、相手の美点を知る、習慣の感染しやすさと、広まっていく力、親切に見える不親切、人生は努力にある、正しい立場に近づき、間違った立場から遠ざかる道、第4章では、本当に正しく経済活動を行う方法、「経済活動」と「富と地位」を、孔子はどう考えていたか、貧しさを防ぐために真っ先に必要なもの、金銭に罪はない、よく集めて、よく使おうである。第5章では、熱い真心が必要だ、道徳は進化すべきか、一日を新たな気持ちで、修験者の失敗、本当の『文明』である。第6章では、人格の基準とは何か、二宮尊徳と西郷隆盛、自分を磨くのは、理屈ではない、自分を磨くことに対する誤解を反論する、実際に効果のある人格の養成法である。第7章では、仁を実践するにあたっては、自分の師匠にも遠慮しない、王道—「思いやりの道」をただ歩むだけだ、競争の善意と悪意、合理的な経営である。第8章では、武士道とは実業道だ、模倣の時代に別れを告げよう、果たしてだれの責任なのか、利益を追求する学問のマイナス面をなくしていくべきだ、こんな誤解があるである。第9章では、孝行は強制するものではない、現代教育の得たもの、失ったもの、偉人とその母、理論より実際、人材余りになる大きな原因である。第10章では、良心と思いやりだけだ、自分ができることをすべてしたうえで、運命を待て、順逆、二つの境地はどこから来るのか、細心にして大胆であれ、成功と失敗は、自分の身体に残ったカスである。アンダーラインは筆者。

各項目は、非常に示唆に富んでおり、筆者自身が若い時にこの書に触れておればと感じるところである。

「雨夜譚」は、渋沢栄一自伝であり、長幸男が校注しており、岩波文庫刊である。1984年11月16日第1刷発行で、筆者は2019年5月15日 第14刷発行を視ている。「雨夜譚」は、

はしがき、卷之一、卷之二、卷之三、卷之四、卷之五、維新以後における経済界の発達、校注、解説（長幸男）で構成されている。

ここで、「雨夜譚」 はしがきを記す。

みじかしと悟れば一瞬にもたらず、ながしと観ずれば千秋にもあまるは、げに人の一生にぞありける。されどそのみじかしといいながしと思うも、必ずしも来径（きえ）ゆく年月の数によるにはあらず、その身に遭遇する事草（ことぐさ）の多少によりて、この概念に長短の差別を生ずるものぞかし。そもそもおのが生涯をいわんに、むかし故郷にありし頃は、犁（すき）とり簀（あじか）にないて、霖雨（りんう）には小麦の蝶に化せんを懼（おそ）れ、旱（ひで）りにはまた苗代水の足らざるをかこちけるが、世のみだれゆくさまをなげきて、負気（ふき）なくも国家の憂（うれい）をおのが憂おのが憂とせしより住みなれし草の庵（いおり）を立出で、西の都に赴（おもむ）きしに、ゆくりなくも一橋の公にめされて、三とせの春秋を過しぬ。この公、大樹（たいじゅ）の職を継給いし後、その実弟なる徳川民部公子（とくがわみんぶこうし）の泰西留学に扈從（こしょう）せよとの命蒙（こうむ）り、慶応の三とせという年の正月、御国を首途（かどで）せり。かくて英仏蘭伊白などの国々を歴遊し、その年の冬より仏国にて留学し給いしが、折しも御国の政変により、その志も遂げ得ず、空しく帰国せしは、明治元年の冬なりき。飛鳥川淵瀬かわれる世となりければ、おのずからむかししのばれて、公の幽居し給う駿河の国なる静岡の里に移り、余所（よそ）ながらもその傍らにて残生を送らんとほりせしも、あくる二年の冬ばかりに、やんごとなき仰せをうけ給わりて、あずまのみやにまい登り、四とせがほど職事（しきじ）にあずかりぬ。さらに官辺の勤仕（きんじ）は、もとよりおのが本意にあらざれば、同じ六年の夏、せちに請い奉（たてまつ）りてその職をいなみ、今の身とはなりぬ。かくてのち二十年あまりの年月が経れども、維新前後の五、七年こそ、いとながかりし心地せられしが、おのが境界は、世の変遷につれて推（お）しうつれるさま、故郷にて飼いたりし蚕の、卵種より孵化して、四たび眠食をかさね、また変化して、もとの卵種になれるが如し。これ偶然のこととはいへ、おのが志のあるところをみるに足れり。おのれ別に人にすぐれし才芸あるにあらねど、ただこの年月、一つの真ごころをもて、万（よろ）ずの事にあたりつれば、かの一信万軍に敵すの古諺（こげん）の如く、何事につけても、さのみ難きを覚えぬ、何わざをとりても、さばかり破れはとらざりき。そのなし得たる跡につけても、めでたきふしこそなけれ、心に恥じ身に疾（やま）しき事とては秋毫（しゅうごう）の末にもあらず。今は三十年あまりの、種々の事どもを想いめぐらせば、ゆめうつつのわきだになけれど、身に実歴せしものは、まのあたりの如くおもわれて、忘れんとするも忘れがてれば、さいつころより、うからやからの請いのまにまに、すぎこしむかしがたりを雨夜の徒然（つれずれ）にうちいでしを、傍にて筆記せしものありて、その水茎の跡いつしか数かさなれるをみれば、われながら千秋を経し観あり。ついにこれを雨夜譚と名づけて、ひとつの冊子とはなしぬ。されどこはただ半生の経歴を略述せしまでにして、もとより世のため人のためにとてなししわざにはあらず、おのがなからん後うからや

からの人々これを読み、我仏とうとしと思えば、かねての望みは足りぬべくなん。
ゆずりおく このまごころの ひとつをば なからむのちの かたみともみよ。

明治廿七年十二月

青淵（せいえん）老人しるす

卷之一では、余が少年時代、立志出郷関、卷之二では、浪人生活、一橋家出仕、兵隊募集の苦心、産業奨励と藩札発行、卷之三では、幕府出仕、外国行、卷之四では、帰朝と形勢の一変、静岡藩出仕と平常倉、明治政府出仕、卷之五では、在官中の事業、退官と建白書、財政改革に関する奉議、明治維新後における経済界の発達では、目次として、第一節緒言、第二節 貨幣制度の整理、第三節 公債の沿革、第四節 銀行の発達、第五節 会社企業の発達、第六節 結言となっている。

余が少年時代では、生地および父母、幼児の読書、ようやく農商に志す、忘れ難き父の教訓、代官の痛罵に奮起す、立志出郷関では、青雲の志禁ずるあたわず、江戸に遊学す、偵察を京都に送る、暴挙の企図、よそながら父へ暇乞い、九死に臨んで一生を得たり、意見採用さる、意想外の難問題、忙中の閑日月、莊屋を相手に手詰の談判、代官を説破す、本望見事に成功、浪人生活では、京都行、天下の志士と交わる、同士の就縛、嫌疑の詰問、一橋家出仕の勧告と仕官論、仕官の決意と意見書の捧呈、内御目見と意見開陳、一橋家出仕では、奉公の始め、自炊生活と借金心配、隠密として折田要藏の門に入る、酔興、人選御用として関東に下る、恩人平岡円四郎の死、京都の形勢、水戸浪士一件、緑酒紅灯の袖に居て心を鉄石にす、兵隊募集の苦心では、兵備に関する建言、意見採用さる、意想外の難問題、忙中の閑日月、莊屋を相手に手詰の談判、代官を説破す、本望見事に成功、産業奨励と藩札発行では、殖産興業の発案、勘定組頭に任命さる、幕府出仕では、長州征伐の議、慶喜公十五代将軍に推さる、反対意見の開陣、再転して幕府の臣となる、大沢源次郎の召捕、怏々として楽しまず、外国行では、仏国行の御内意とその準備、一行の発程、パリ到着後の一悶着、紛議の仲裁、欧州滞留中の仕事、異郷にて聞きし故郷の政変、公子留学の建議、留学の沙汰やみ、帰朝と形勢の一変では、帰朝、航海中に聞いた日本の風聞、意見書を箱館軍中の渋沢喜作に送る、六年振りに父に再開、身の寄る辺なき亡国の臣、静岡藩出仕と平常倉では、静岡行と帰朝の復命、勘定組頭の任命に対する余が憤怒、疑念の氷解、新事業の発案、合本事業の嚆矢常平倉、明治政府出仕では、大蔵省租税司正拝命、大隈大輔の言に服して意を決す、在官中の事業では、建議して改正局を新設す、諸事改良の着手、郵便法の改正、貨幣制度の改正調査、廃藩置県と大蔵省の事務繁激、始めて実業家たる志望を起す、大蔵卿大久保利通と意見の衝突、退官の内意を井上大蔵大輔に漏らす、大阪出張中の新事務、父の永眠、大蔵省対諸省の権限争い、国立銀行条例の実施、退官と建白書では、台湾征討反対意見、袖を聯ねて官途を辞す、建白書の奉呈、退官後の方針、財政改革に関する奉議では、種々申し述べられている、明治維新後における経済界の発達では、目次があり、第一節の緒言、第二節の貨幣制度、第三節の公債の沿革、第四節の銀行の発達、第五節の会社企業の発達、第六節の結言まで述べている。

緒言では、富岡製糸場は明治3年大蔵少輔伊藤博文・租税正渋沢栄一が命ぜられて設立

したもので、フランス人プリーナーを雇い入れて操業にあたった。第四節の銀行の発達の三項では、第一国立銀行二代目清水喜助の設計になる和洋折衷の豪華な様式が載っている。四項では、国立銀行紙幣(拾圓券の表裏)が載っている。

『雨夜譚』は、『論語と算盤』の元になっており、全般的に詳しく記され、特に、明治維新後における経済界の発達では、きめ細かく記されていて明治維新後における経済界の発達では、ページも213頁から292頁に及んでいる。

解説によれば、1913年(大正2)に択善社から発行された『青淵先生世路日記・雨夜物語』によって、そう読んだのであろうが、これは「雨夜譚」おのものではない。本文庫版では『雨夜譚(あまよがたり)』とよぶこととした。それは以下のようななりたにしたがったのである。1897(明治30)年から1900(同33)年にかけて、渋沢栄一の還暦(1899年)を祝する竜門社の記念事業の一つとして阪谷芳郎(栄一の次女琴子の夫。当時大蔵省主計局長、1906=明治39年に第一次西園寺内閣の大蔵大臣となる)を委員長として『青淵先生60年史一名近世実業発達史』二巻、二千二百ページが編纂刊行された。この物語に、「雨夜譚」栄一の生誕から1873(明治6)年大蔵省退官に至る34年の経歴をつたえる基本資料として、原文のまま引用された。ただし、彼の行路のそれぞれの時期にそった引用であったから、全文が読みとおせる原形のまま収録されたわけではなかった。『青淵先生60年史』は「雨夜譚」のなりたちについてこう記してある。

此書ハ先生子弟ノ請ニヨリ、明治20年、深川福住町ノ邸ニ於テ、幼児ヨリ明治6年退官マデノ経歴ヲ談話セラレタルヲ筆記シタルモノナリ

この筆記は一冊の書物として刊行されたことはなく、筆記本として保存されていたものようである。そののち栄一は1894(明治27)年12月に「雨夜譚はじがき 青淵老人」なる文章を執筆し、『竜門雑誌』第81号(明治28年2月15日発行)の分園欄に寄せている。

本書の原文は失われ、『青淵先生60年史』の切り抜きを合本した一冊がつかえられており、これに原本(おそらく筆記本)との照合が記入されていた。この合綴本を底本として、1968(昭和43)年に『渋沢栄一伝記資料別巻第五』の「雨夜譚」の原稿が作られた。この合綴本は、右『資料』編纂に際しての赤鉛筆・赤インクに加筆をのこしたまま、今日渋沢資料館(東京都北区西ノ原二ノ一六ノ一、渋沢青淵旧邸跡、竜門社付属、昭和57年11月15日開館)に保存されている。本文庫本は「資料」を底本とし、右合綴本を参照した。読者の便のために新仮名遣いになおす等、読みやすくしたが、その点については範例を参照されたい。

渋沢栄一の伝記としては、右の『60年史』のほか、『青淵回顧録』(二巻二冊、小貫修一郎編、同刊行会、昭和二年)、『渋沢栄一自叙伝』(高橋重治編、渋沢翁頌徳会、昭和十二年)のような栄一自身の回想を中心に編纂されたものや、白石善太郎『渋沢栄一翁』

(刀江書院、昭和八年)、幸田露伴『渋沢栄一伝』(岩波書店、昭和一四年)、土屋喬雄『渋沢栄一伝』(日本財界人物伝全集一、東洋書院、昭和三〇年)、渋沢秀雄『父渋沢栄一』(二

卷二冊，実業之日本社，昭和三四年）その他があるが，幼児から少年期にいたる記述の大筋は，自叙や他者による著述をとわず，ほぼこの「雨夜譚」が底本となっており，それに栄一自身や第三者の折にふれての記述，談話や『航西日記』や長女歌子の回想『はゞその落葉』などが挿入された形となっている．その意味で，本書は栄一伝のもっとも基本となる資料とっていいだろう．土屋喬雄を主任とする竜門社編『渋沢栄一伝記資料』（58巻，58冊，別巻10冊，同刊行会，昭和30-46年）は，渋沢の人間像と業績をものがたる直接間接諸資料を，巨細をえらばず，網羅的かつ編年的に集大成した歴大なものであり，渋沢栄一に関するすべてをおさめた宝庫というべきであるが，その中においても，初期資料で要の地位をしめるものが本書である．

ウキペディア (Wikipedia) (<https://ja.wikipedia.org>) によれば， 渋沢栄一の出生は，1840年3月11日(天保11年2月13日)に武蔵国榛沢郡血洗島(現，埼玉県深谷市血洗島)，1931年(昭和6)11月1日に亡くなっている．爵位勲等位階は正二位勲一等子爵，雅号は青淵(せいえん)である．江戸末期時代に農民(名主身分)から武士(幕臣)に取り立てられ，明治政府では，大蔵少輔事務取扱となり，大蔵大輔井上薫の下で財政事務を行った．退官後は実業家に転じ，第一国立銀行や理化学研究所，東京証券取引所といった多種多様な会社を設立，営業に関わり，二松學舎第3代舎長(現，二松学舎大学)を始めた他，商法講習所(現，一橋大学)，大倉商業学校(現，東京経済大学)の設立をされた．

余談であるが，2021年のNHK大河ドラマ(60回)に予定されている．

4. なぜいま渋沢栄一？

2020年2月3日の日本経済新聞17面の「読むヒント」『なぜいま、渋沢栄一？』が載っている．それによると，渋沢栄一が再び注目されている．私益と公益を同時に追求する思想家でもあった．先の見えない変革期の指針として，人物や著作への関心が高まっている．敗戦後，作家，大仏次郎が本誌に連載した『激流 渋沢栄一の若き日』は，焦土と化した日本を幕末維新のころに重ねる．渋沢が時を超えて，復興を呼び掛けているかのようだ．「運河を掘ろう．鉄道を敷こう．瓦斯灯をつけよう．暗い世の中が明るくなるのだ．人が今よりも文明の恩に浴して，現在に数多い不幸が，少しずつでも軽減されて行くのだ」．崖ぶちに立たされるたびに，どうやって新しい道を切り開いてきたのか．小説『雄気堂々』(城山三郎著)からも，うかがえる．最も注目されているのはその考え方だ．近代日本経済の出发点となった発想が，いま求められている．

若いころから，私益と公益を両立させる「道徳経済合一」という考えを持っていた．対仏中に，この思想を形にできる「合本組織(株式会社)」に出会う．

渋沢は，江戸幕府の最後の将軍，徳川慶喜が仏万博に送った使節団の会計係だった．当時，パリでは，社会哲学者サン・シモンが考え出した株式による銀行や会社ができている．「零細な大衆の資金をあつめ，これによって『資本』をつくり，社会的に意義のある大きな仕事をやる仕組み—この事業のやり方を『合本主義』として理解したのは一行中彼ひとりである」．道中，運河工事を見て，規模の大きさや公益目的だという点にも深く感動した

(小島直紀著『日本さらりーまん外交』)。

渋沢は、この仕組みが身分制度や官尊民卑の風土を打ち破る強力な道具になると確信する。仏文学者、鹿島茂が『渋沢栄一 算盤編』で、開眼する過程を詳細に追跡している。

「半世紀にわたって無給の指南役として活躍をつづけた。多くの実業家、官僚の相談に乗り指導した。経済団体をつくり、教育訓練に携わり、あらゆる種類の講座、セミナー、討論会を組織し――一橋大学、一橋大学を潰した」(『断絶の時代』上田惇生訳)。

「企業の社会貢献」が不可欠とみて、幅広い社会事業、福祉、慈善活動などにも取り組んだ。経営学者、島田昌和は、そうした面から、社会を変革する力を持った「社会企業家」の先駆けだったとみている(『渋沢栄一』)。

世界は激動している。日本経済、産業も先が見えない。地球環境を守り、持続可能な社会を実現するには何が必要か。個人や会社、国は、どう動けばいいか。「日本経済の原点」渋沢の門をたたけば、きっと難題を解くヒントが見つかるはずだ。

【さらにオススメの3冊】

- ①『雨夜譚』渋沢栄一自伝(長幸男 校注) 幕末からの波乱に満ちた体験談。
- ②『父 渋沢栄一』(渋沢秀雄) 四男が見た実業家の素顔。
- ③『渋沢栄一 近代の創造』(山本七平) 近代化の源を江戸までさかのぼる。

5. おわりに

渋沢栄一氏について、『論語と算盤』『雨夜譚(あまよがたり)』の2冊について、詳しく述べた。日経産業新聞等も参考とした。渋沢栄一氏について、読者の皆様に少しでも参考になれば幸いである。